リポート徳島

県内外国人に「実践的日本語講座」

就職・自立 活路開く

マナーや慣習も指導 職業選択幅広げる

徳島市昭和町3のわーくぴあ徳島に週5日、外国人たちが集まり、熱心に学んでいる。県労働者福祉協議会が県内在住の外国人を対象に開いている「就職のための日本語講座」だ。県内で暮らす外国人は、2013年6月時点で4953人。日本語があまり話せないままやって来た人も多い。そんな外国人たちが県内で働き、経済的に自立した生活を送るには日本語の習得が不可欠だ。ビジネスマナーや日本社会特有の慣習を織り交ぜた実践的な日本語指導の現場を訪ねた。

（地方部・乾栄里子）

「起立、礼」「おはようございます」。講座は小学校の授業のようなスタイルで始まる。本年度の受講生は中国とブルガリア出身の外国人10人。4～7月の平日3時間、毎日みっちり勉強する。

「『～へ行ってんの？』は、かなり親しい人に使う言い方。職場では『行ってらっしゃいますか？』と聞きます」。ホワイトボードに使用例を書きながら説明する講師の言葉に、受講生は真剣な表情で耳を傾ける。ロールプレーイングやヒアリング、スピーチなど、あらゆる方法で日本語を口にし、耳に入れる。

中国出身の金順玉さん(37)＝徳島市＝は「日本語に毎日触れていると、日常生活の中で理解できる日本語が増えてくる。上達している手応えを感じます」と話す。

金さんは日本人男性と結婚し、1年3カ月前に徳島へやって来た。スーパーで総菜を作る仕事をしている。「今の仕事は1人で黙々と作業し、あまりしゃべらない。日本語が上達したら、接客業に挑戦したい」と目を輝かせた。

講座では、名刺の渡し方や電話応対といったマナーのほか、アフターファイブの付き合い方や宴会時の席次など日本社会特有の決まり事を、場面に合った言い回しと合わせて学習している。「ここで新しいことを習ったら、職場で使ってみるんです。だいぶ話せる言葉が増えましたよ」と金さん。日本語の上達は、職場でのコミュニケーションの幅を広げる。

講座は外国人の就職支援活動の一環として09年度にスタート。毎年度10人程度が受講している。13年度まで有料だったが、14年度は国の助成金を受け、無料で開いている。受講生は今年初めて男性1人の申し込みがあったが、それまでは全員が女性だった。

日本人男性との結婚を機に来県する女性が多いためで、夫と年齢が離れているケースも少なくない。子どもがまだ小さいうちに退職する夫に代わり、一家の家計を支えるために就職を目指す受講者もいる。

外国人が必死になって学ぶのは、日本語が話せないことが大きなハンディキャップとなり、就職する際の選択枝が大いに狭まるからだ。

講座を運営する協議会事務局の兼松文子次長は「母国で高等教育を受けて高い能力を持つ人でも、日本語ができなければ、しゃべる必要のない単純作業に従事するしかない。それは人口が減少し人材が不足する日本社会にとっても、もったいないこと」と強調する。

協議会は「就職のための日本語講座」のほか、介護に特化した会話力を身に付ける講座や、介護職員の資格取得を目的に専門用語を重点的に学ぶ漢字学習講座も予定している。就職支援だけでなく、学校の決まりや行事について学ぶ「保護者のための日本語講座」も8月に計画している。

「外国人はもとより、彼らを取り巻く地域社会のためになる日本語講座にしたい」。兼松次長は力を込めた。

真剣な表情で受講する外国人たち。毎日3時間、みっちりと日本語を学ぶ＝徳島市昭和町3のわーくぴあ徳島